

新冠百話

第五十一話

「滑若と岩清水の岩屋について（語り）」

（要約文）

戦前の滑若（今の泉や若園付近）の様子は、萱葺きの家がほとんどでした。瓦の家という古川さんの家くらいだった。店は佐藤さんという方が商店をやっていた。岡さんも日用雑貨やお酒などを売っていた。この地域には、今の泉地区に二十五戸くらい、若園地区に六戸くらい、そして後に十八戸地区と呼ばれるところには一戸、古岸よりのところに一戸の家がありました。十八戸地区は、戦後になって十八戸の入植者がいたことからこのように呼ばれるようになった。その土地をアイヌ民族は「ベピリカップ」という呼び方をしていました。今の滑若橋辺りを指します。この近くの新冠川から流れ出ている水が清流で、「きれいな水」という意味でこのように呼んでいました。

滑若から岩清水に行く道路が延びたのは、昭和二十年代のことです。それ以前は細々とした、せいぜい馬ソリが通れるくらいの道でした。それは、この奥地で造材を運搬するようになったからです。だから、以前の岩清水は、道が細い危険な場所がたくさんあったわけです。

私は、アイヌ民族である父から、「昔、狩

猟の時に寝起きするために使っていた大きな岩屋があるから行ってみる」と言われ、初めてその存在を知りました。実際に行ってみると、あまりの岩の大きさにワァーッと目を見張った記憶があります。

父の話によると、父の叔父にあたる古川アシンノカルと、そこを拠点として狩りをしたと言っていました。その昔、岩清水の奥に熊の穴があったそうで、古川が十五頭、父が五頭のクマを狩り、岩屋を拠点として猟師の良い思い出をたくさんつくったようです。この岩屋は、定住ということではなく、狩りをするときに一時的に寝泊りする場所として使いました。この近くには小さな沢が流れていて、アイヌ語では「オケンルンペ」と言っていました。

その後、電源開発でこの岩屋のそばにダムができました。岩屋自体は昔ながらの姿ですが、岩の下の方はダムの水の増減によって、環境の影響を受けるようになった。ダムがなければ、より昔に近い岩屋の様子がわかったのかもしれないね。



昔のアイヌ民族が狩猟する際の休憩場として使っていた「岩屋」。岩の陰を利用して寝泊まりしていたという。発電ダムができてからは、岩陰に水が出入りするようになった。

<防火の基本はそこに住む人の自覚です。>

火災による被害をなくすためには、日ごろから火災を発生させないよう注意するのはもちろんですが、万が一出火したときにどのように行動すべきかを覚えておくことも大切です。被害を最小限に抑えるために、家族、地域ぐるみで防火意識を高めましょう！

消防署新冠支署

火災・救急出動状況			（ ） かつこ内は前年同期			
区分	火災件数	救急件数	区分	発生件数	死者	傷者
10月	0件 (1件)	25件 (28件)	10月	1件 (0件)	0人 (0人)	3人 (0人)
4年1～10月	6件 (5件)	287件 (267件)	4年1～10月	7件 (7件)	0人 (1人)	12人 (7人)
交通事故発生状況			（ ） かつこ内は前年同期			
10月	1件 (0件)	0人 (0人)	10月	1件 (0件)	0人 (0人)	3人 (0人)
4年1～10月	7件 (7件)	0人 (1人)	4年1～10月	7件 (7件)	0人 (1人)	12人 (7人)

人のうごき

(令和4年10月末現在)

人口	5,206人	(前月比 ± 0人)
男	2,579人	(前月比 + 8人)
女	2,627人	(前月比 - 8人)
世帯	2,785世帯	(前月比 + 10世帯)

町公式ホームページ

町公式フェイスブック

